

評伝

桃花塾 岩崎佐一先生

その人と為りと御事業について

会員 羽 柴 弘

「明治三十九年の春から、四十三年の十一月まで五年間、佐伯の人に与らして頂いた。僕は今六十四才、即ち六十三年前此の世に存生中の僕、及び妻、娘にとつて、佐伯の五年間が一番思い出が多い……」

これは、昭和八年十一月十二日から、佐伯新聞(主筆阿南卓一)に毎週連載された「廿五年の昔話」と題する思い出話、文中「僕」という筆者は、大阪に引退されていた、元南海郡郡長多羅間政輔氏である。四十年たった今日もし生きていざさると、百歳を越しておられる。

その在任中、鐵道院總裁を佐伯に迎えたり、佐伯所に於いて靈燈がついたり、米水津道路が開通したり、多羅間郡長の存在と実績は、今も年寄の方々の語り草になつてゐる。

その多羅間郡長の昔話の中に、実は主題の、岩崎桃花塾長のことが紹介され、私にとつてはたつた一一つの岩崎先生の資料であつた。そして貴重なこの新聞切抜帖を提示、使ひ貸して下さつたのは、当時郡役所の給仕として多羅間郡長に仕えていた、高野長助君(本会顧問)である。前書がいざさか念がいろいろあるが、今は現桃花塾長の御厚意によつて、多くの資料もいたゞいておるので、以下数回にわたつて岩崎先生の人とその事業を紹介する

ことにしよう。まず多羅間郡長の思い出話から。四十年前の昭和八年に書かれたものであることを念頭に、お読みいただきたい。

(資料一) 桃花塾の祭展 (多羅間政輔)

佐伯の人で外に名を知られる人に、岩崎佐一君がある。大阪に在つて独力で桃花塾を開き、世に不幸なる白痴者を集め、佛蘭低能兒教育を施して居られる。

塾は創設以来二十年内外になり、毎年紀元節・天長節等には宮内省より御下賜金の下る学校——というより寧ろ半農助で、校舎校庭がなかく、宏大であるのに、僕は何時も感服させられる。

然るに君はなかなか之に満足せず、大阪を距る五、六里、金剛山麓に適當の地を見立て、之に校舎を新築して近々移転される筈になつてゐる。そこは敷地一万坪以上、諸種の農業、殖樹、養魚等何でもやれる事になつて居る。

然るに君は又更に大拡張を行つて敷地十坪にするとは、全く驚くべき飛展ではないか。僕は寧ろ君の手腕に敬服するものである。

尚且令弟準一君及び妻の令夫人が、君に力を合わせ一生懸命で君の事業を助けて居られるには、其の美しさに敬意を捧げざるを得ない。

精薄兒教護施設「桃花塾」とは、一体どんな施設であるのか。創設の岩崎佐一先生はどんなお方であつたか。そして時の佐伯とどんなにかわりあひがあつたのか。以下順をおうて述べたいと思ふが、まずこの多羅間郡長の書かれたことは、ほとんどその通りで、簡潔な記述の中に事實を的確にとらえ、正しい批判を加えてゐる。まことに

(以下前頁下段の如く)